第20回女と男の一行詩・最優秀賞作品／「ありがとう」 感謝の言葉 すぐに言おう

帯広市男女共同参画情報誌

カスタネット

Vol.44 2022.9

特集！

★教育現場からみた男女共同参画

★『私がすすめる一冊』

★推進員だより

バックナンバーは
こちらのＱＲコードから
読むことができます

「カスタネット」とは…２枚の丸い木が合わさり音が出る楽器から、女性と男性が共に歩むイメージを表現したものです。

教育現場からみた男女共同参画

▽今回は、教育現場からみた男女共同参画について、帯広畜産大学で法学を担当している野原香織先生と、毎年全校生徒が「女と男の一行詩」を応募してくださっている帯広北高等学校の小西千加先生にお話を伺いました。

帯広畜産大学　野原香織先生

男女共同参画の視点から　学生との向き合い方

大学では男女で学生を分ける機会も少なく、基本的に性別を意識することなく個人として接しています。ただ、自分が女性であることで、女性の社会進出や生理休暇など、男性教員が触れにくいような話も話題にしやすいということはあるかもしれません。

学生の男女共同参画への考え方

授業の中で、男子学生に女子学生が就職をして社会に出ていくことについて尋ねてみたところ、男子学生はそれを当然と思っているようで、女性は専業主婦になるものという感覚は確実に減っていると感じます。

また、憲法が保障する平等権と性別について考えるために昨年度とったアンケートでは、「入社試験にあたって、応募者の業績等が同等の評価であれば、女性を採用するという採用基準をとることは、性別による差別だと思いますか?」という設問に、「法学（日本国憲法）」を受講する82％（156人中128人）の学生が差別にあたると回答しました。

私自身が似たような採用基準で採用されたことを伝えると、「逆差別ではないか」とショックを受けているようでした。自分が学生の頃は、女性の社会進出促進のために女性を優先して採用するということに特に違和感はありませんでしたが、男女共同参画や平等についての考え方が時代によって変わってきているのだと思います。

企業等の採用選考では、女性労働者の比率が相当程度少ない場合に、雇用における男女間の格差を是正するため、こうした積極的な措置（ポジティブ・アクション）がとられることがありますが、なぜそのような採用基準をとる必要があるのか現状を丁寧に説明し、社会全体で理解し合わなければ、どんどん溝が深まってしまうのではないかとも感じています。

男女で就職先の差は?

学生が就職先を選ぶ際に男女の差はなく、自分のやりたいことを目指して活動していますが、男女とも有給休暇や育児休業の取得率といった働き方を重視しています。また、平等意識が強いからこそ、現実社会では賃金や待遇等の面で格差があることに驚く学生も多いです。社会に出た時に、少し先を生きている人たちの慣習に従わなければならない場面に直面することもあると思いますが、学生たちの、「男女関係なく自分のやりたいことをやるのが当たり前」という気持ちを早く社会が受け止めてほしいと願っています。

帯広北高等学校　小西千加先生

「女と男の一行詩」を始めた経過

「女と男の一行詩」は国語の授業の一環として取り組んでいます。元々は短歌コンクールに応募していたそうですが、短歌は季語や字数の制約などがあるため考えるのが難しく、全校生徒がフラットに考えられるようなものはないかと話をしていた時に一行詩を募集していることを知り、取り組み始めたと前任者から聞いています。

一行詩に取り組む生徒の様子

全校生徒を対象に3年間取り組んでいるので、2・3年生は「また今年もね!」とすぐに受け止めています。初めて取り組む1年生には、まず「男女共同参画とは何か」という話をしてから取り組むようにしていますが、生徒たちは楽しんで取り組んでいます。

取り組み後の生徒の変化

最近、教育現場でも話題になっているジェンダーについて、生徒自身が考えるきっかけになっていると感じます。

生徒同士の会話の中で、「重いものを持つときは、なんで男子だけ?」「なんで女子はあぐらをかいたらいけないの?」など、ジェンダーに関する気づきや素朴な疑問が聞こえてきたことに、変化を感じました。

一行詩を通して先生が感じたこと

学年が上がるにつれて視点が変わり、考えることが大人になっていくなと感じます。また、普段人に伝えられない想いを言葉にしたり、自分の気持ちを文字にして書くことは大切なことだと思います。

今の生徒は協調性が高く、周りの意見に合わせようとする生徒が多いです。そういった中で一行詩は必ず自分の意思で書かなければいけないものなので、自分の気持ちを表現する場としてとても大切なものだと思っています。

生徒と接する中で気づかされたこと

一行詩の作品を読んでいて、生徒同士のことよりも、生徒から見た大人の様子が表されている作品が多い印象を受けました。そこには大人では気づけない、高校生だからこそわかる視点があると感じます。また、自分自身改めて考え直さなければと気づかされることもあります。

中には性別についてのことなど、友達や親に話せない生徒もいると思いますが、今はYouTubeやSNSなどで、オープンにしているタレントの方々が多くなってきているので、そういった生徒たちの後押しになっていると思います。また、昔は発信する場がない時代でしたが、今はいろいろなところで悩みを打ち明けられるので、高校を卒業して人生をどう歩もうか考えている生徒の支えになっていると思います。

インタビューを終えて

帯広畜産大学では、学生アンケートの結果などから、学生は男女平等意識を強く感じており、就職先を選ぶときに、労働条件などを重視しつつ自分のやりたいことを目指していることがわかりました。また、学生の考えと一般社会のギャップの大きさを実感しました。（伊藤推進員）

帯広北高等学校では、「女と男の一行詩」に全校で取り組んでいる中で、一年生には男女共同参画について学習してから取りかかるということで、一行詩に取り組むことにより男女平等社会に向けた視点が育てられ、生徒にとって良い学習になると思いました。（遠藤推進員）

「今の高校生・大学生に男女差の意識はなく、自分自身生徒に対して男女ではなく個人として向き合っている。」「生徒の視点からの発信に私自身がはっと気づかされる。」との先生のお話に、変わっていかなければならないのは私たち大人なのだと痛感しました。

男子学生が就職先を考える際に育児休業制度の有無を問う今、育児休業中の代替職員の配置など、早急にしなければならない事だらけの現状です。これからの社会を担う若い世代に応える社会を創出していく壮年・高年でありたいと思います。（田沼推進員）

『私がすすめる一冊』

失敗しないためのジェンダー表現ガイドブック

著／新聞労連ジェンダー表現ガイドブック編集チーム　発行／小学館

この本は全国の新聞記者の皆さんが有志で集まり、自発的に制作した本です。１章では、「マイクロアグレッション（繊細な攻撃）」日本語では「日々の無意識の偏見・抑圧」について書かれています。子どもを育てながら社会的に活躍する女性を「ママさん選手」「ママさん議員」などと表現することがありますが、「パパさん選手」「パパさん議員」とは言わないことを考えると、非常にアンバランスな表現だと書かれています。３章では、報道におけるジェンダー表現の中でも課題が多い、性暴力報道から見る表現について書かれています。啓蒙活動の問題として、性犯罪防止キャンペーンの中には、「寝ている間も注意」「エレベーターの中では男性に背を向けない」など、これだけ女性側に注意を促されると、被害に遭ったときに「気を付けなかった自分が悪い」と思ってしまいます。

メディア業界は、まだまだ男社会で、女性従業員の割合は世界的に見ても最低水準に位置しているようです。その中で、無意識の中の差別、偏見を自覚し「当事者に寄り添った記事、ニュースを伝えたい」と取り組んでいる記者の皆さんの努力を知ることができました。そして、私自身の中にもまだまだ差別意識があることに気づかされた一冊でした。（遠藤推進員）

とかちプラザ１階総合案内北側の「女性情報コーナー」でも、貸し出しを行っています！とかちプラザをご利用の際は、ぜひお立ち寄りください。

推進員だより

帯広市男女共同参画推進員は、市民協働のパートナーとして、帯広市と一緒に男女共同参画を広げるための活動をしています。ここでは、活動の様子やメンバーについて紹介します。

今回は高井が担当です。

45年間、職場では、いつも女性の『お茶汲み問題』議論になります。現場に出る男性が多い職場であり、お茶汲みという勤務前の30分の仕事は、現場に出られない事務職の女性の仕事として当たり前のような働き方がありました。

職場を去って十数年、今はどうなっているのか後輩に聞くと、若い人はペットボトルやマイボトルを持参するため、負担も減っていると言います。

女性の働き方も事務職だけでなく、現場に出る人も多くなり変化があります。今後働き方も在宅勤務を採用する職場が多くなり、女性の求める働き方も変化するだろうと思います。

また、最近は料理上手な男性が多くなりました。年齢が高くなると、体力的にも無理と諦めてしまいがちですが、いつでもピンチヒッターになれるよう、ごはんやみそ汁の作り方をマスターして、男女ともにスマートに生きたいものです。

ご意見・ご感想をお待ちしております！
〒080-8670
帯広市西５条南７丁目１　帯広市役所　市民活動課
電話 0155-65-4134　FAX 0155-23-0156
Ｅメール danjyo@city.obihiro.hokkaido.jp

令和４年９月 発行
●発　　行：帯広市
●企画編集：帯広市男女共同参画推進員
伊藤 容子・浦端 昭道・遠藤 妙子・
川尻 れえ子・田沼 誠子・沼田 秀実